



埴谷雄高作品集

埴谷雄高論

別卷

河出書房新社

埴谷雄高作品集別巻 ©1972

一九七二年一月二五日印刷 一九七二年一月三〇日発行

定価——一二〇〇円



著者——武田泰淳 他

装画——駒井哲郎 装本——杉浦康平

発行者——中島隆之

発行所——株式会社 河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三一六 電話 東京 二九二—三七二一 振替 東京 一〇八〇二

印刷者——守安 巖 印刷所——東京印刷株式会社

製版印刷——凸版印刷株式会社

製本所——小高製本工業株式会社 0395—436101—0961

埴谷雄高作品集別卷

埴谷雄高論

目次

目次

7—10 “あつは”と“ぶふい”——武田泰淳

11—24 埴谷雄高論——吉本隆明

25—57 逸脱の論理——高橋和巳

58—74 小説は改変する——秋山駿

75—102 『死霊』入門——本多秋五

103—126 死者もまた夢をみる——遠丸立

127—142 『死霊』論——桶谷秀昭

143—180 ロマンエスキの反語——菅谷規矩雄

181—196 『不合理ゆえに吾信ず』論・覚え書——藤一也

197—215 原初に自発するもの——日野啓三

216—243 虚無主義の形成——鶴見俊輔

244—253 永久革命者とは何か——吉本隆明

254—273 国家と存在の告発——伊藤成彦

274—290 死滅せざるアナーキズム——宮内豊

291—313 埴谷雄高の想像力——竹内泰宏

314—333 潜行と飛翔——森川達也

334—348 非在と意識——栗津則雄

349—385 「論理の忌まわしさ」について——白川正芳

386—405 闇へ——諸田和治

406—423 自殺の形而上学——磯田光一

424—442 埴谷雄高年譜——白川正芳編

『あつは』と『ぶふい』——武田泰淳

——埴谷雄高『死霊』について

作家は小説という手段によつて摸索する。この自由な、まるで自然そのもののように複雑にして豊富な手段によつて、何ものかをまさぐりもとめる。時には、それは手の中で握つたり、はなしたりでき、しばらく或る場所へ置き、他の物を取り上げてもよいような、便利な道具の一種にさえ見えることがある。それがあまりに便利であり、自由であるため、その道具そのものの形や重さが、それだけが作家をとらえてしまうこともある。そして彼は自分のスタイルを大切に、油をつけてよくみがき、誰が見ても、彼が使いなれ、使いあげ、自分のものとした道具であると気づくようにする。そのばあい、彼は小説を、つまりその道具を手にして、それを自分の自由にえらぶことができ、つかいこなすことができると信じこんだ、老職人のような安心をおぼえているにちがいない。だが、ある種の作家はそのような安心をもたない。おそらくは大部分のすぐれた作家は、そのような老職人の如き安心を持つことを永久に許されない。彼らは道具のように見える小説が、掌からひきははずすこともできず、

脳神経にもつらなり、彼ら自身の呼吸や脈搏までつたえてしまふ、密着し吸着し、かえつて彼らに苦痛や不安をあたえる奇妙な生物であることを知らされる。それは時には巨大であり、醜怪であり、血まみれである。少くとも便利そうには見えない。その時、小説はそれらの作家たちにとつて、堪えがたいほどの重みを有し、おそるべき光をはなち、その性能の加速度的増大に自らがおののくような物であるかもしれない。小説がそのような物である時、それによつて摸索されるものとは何であろうか。また、それを手にした作家の態度とは如何ようなものであろうか。

『死霊』は執拗に摸索する。時には荒々しく、時にはよろめきながら摸索する。そしてその摸索は強靱である。その全形は思いつめ、四肢を打ちふるわせ、強敵にたち向つている力士に似ている。作者はその全形で、虚空を凝視し、非現実を追求しているかに見える。埴谷は「現実つてやつは嫌いなんだ」と言う。だが彼は真実、「現実」が嫌いなのだろうか。現実以外のものをまさぐり求

めているのだろうか。それによつてあのような全形を要求するのだろうか。

現実とは或る人には一塊のパンであり、それをめぐる家庭生活であり、また或る人には政党の勢力であり、その世界における力関係であつたりする。私小説作家は、「私」の耳目の及ばぬところに現実をみつめないかもしれない。或は心理のちよつとした緊張を握りどころとし、或は肉体の一部の感覚を本拠として、自分こそはレアリストだと叫ぶかもしれぬ。

しかし現実とは存在するもののすべてである。少くとも壇谷にとつて現実とはまさにそのようなものである。彼は現実に対して眼をつぶつてゐるのではない。むしろたえまなく、あらゆる場所で大胆な瞳をかがやかせてゐる。他人がその存在にさえ気づかぬような「物」でさえ、彼は何度もうくりかえし見てしまつてゐるのだ。彼はそのために遠視であり、近視であり、乱視であらねばならぬほど、その無敵の「物」の原始と衰滅に、熟視によつて結びつけられてゐる。彼は現実にとりかこまれてゐる。その一つ一つが濃厚な密度を持つ各現実、しかもそれは運動しつつ、その過去と未来の呼びかけを停止しない。そのような総現実には、ムシムシと彼のむなもとにつめかけ、彼の思考を呼吸困難にしている。彼は『死霊』の一人物のように、その気配を常に感ずるのだ。彼は思考の骨がミリミリ鳴り、妄想の肉がみるみる瘦せはそり、またふくれあがるのを日夜おぼえるにちがいない。何故ならば、あまりにも遠慮なく総現実には、彼をおしつぶし、

めざまし、そのかし、遠のき、姿を消し、また密着しては、彼を不眠、その中に於ては『死霊』を書くより以外に時をすごす方法のない、めざましい不眠に追いやるからだ。その状態を感覚しつつ彼は、登場人物と共に「あつは」と言い、「ぶふい」と言うのである。この二つの感嘆詞、あるいは声音は、『死霊』にまで彼を押しやる彼の宇宙、彼の総現実の圧力を明示している。「あつは」も「ぶふい」も共に素朴な発声である。充実されたものの発し出された声である。彼の諸人物はどのように奇怪な未来的長広舌をふるいながらも、この原始土人の如き発声を忘れない。それは「おお」という発声のヴァリエーションであるかもしれぬが、各々の独自の意味を含んでいる。

「あつは」はドイツ文学、特に『ファウスト』などにでてくるAcht! とは多少異つてゐる。壮大な自然や女的美を目撃したりするよりは、むしろ自分自身の心のうごめき、或は会話の相手の心理なり論理なりにおどろき、そこに何ものかを見出し、それによつてつき動かされ、いら立つたときに使用されている。それは一種のたまらなさの感情を示す点で、「ぶふい」に似ている。だが「ぶふい」は「あつは」より能動的である。それは相手の思想を断ち切り、はねかえし、自分の心理を放出する前ぶれである。それはもう踏み切つてゐる。思ひつめ発見され、おどかさされ、「あつは」された物はそこでその主体によつて決断され、「ぶふい」され、方向をあたえられる。常に「あつは」し、「ぶふい」しつづけること

は、常に発論し、論争し、論断することである。そのたえまなく流出するエネルギー、まるで原子力のように無限な諸人物のエネルギーなくしては、「あつは」も「ぶふい」も、大げさな、耳ざわりなせりふと化してしまふ。埴谷は単なる技巧的せりふとして、これを使用しているのではない。彼自身が彼の宇宙、彼の総現実に向つて、けなげにも「あつは」し、「ぶふい」する、その強靱なエネルギーの低く沈み、もりあがり、さか立とうとする物音なのである。「あつは」も「ぶふい」もまた「おお」も、独断であり、ガンコであり、倨傲であり、反抗であり、或る種のものの無視であり、蔑視であるかもしれぬ。しかしそれが神経質な味嘆や、暴露や、氣ばらしとしてでなく、すべてのざわめきを吸いこむ宇宙的な闇、すべてのスピードを嘲笑する真空間に向つてなされる場合、それはもはやきわめて素直な、きわめて靜的な、調和音となる可能性を包んでいる。

『死霊』を一種の能狂言に見たててもできるかもしれない。墓地や霧ふかい運河や、蝙蝠の羽音のする屋根裏べやは、それぞれ能役者が幽玄の美を組織する特定の場所似ている。そこではあの異様にゆつたりした能面の下の声が、現実（いわゆる狭い現実）の声よりも、なまなましくひびく。その舞台と能面と謡いの、それぞれ單純な、限定された条件が、かえつて複雑微妙な人生、そのふかみに於て、よみがえらせる。そこでは鬼女や竜神や幽霊や盲人や狂女、極端な人間存在が、ねづよい自己主張をはじめ。或は肩肩を張り、或は袖で面をおお

い、あるいは舞台をぐるぐるとめぐる。それは日常の事件の起伏、日常の食物の消化速度などとは、少しちがつた時もきざむ、あまりにも確固たる自己主張である。だがそれが現実でないと誰が言えるだろうか。それははじまると共に存在し、進行につれていよいよ自己の世界を明確にして行くではないか。その面のあまりにも彫りの深い、あまりにも色彩の決定された強さ、及びその衣裳のもののしき、重々しさ、そして謡いのテンポの自分勝手な、入り来らぬものはうけつけぬ非妥協性は、それなくしては、その美も、その思想も消え失せてしまうものである。『死霊』はたしかに、その種の形式を保有している。

その形式は、作者が小説を手軽な道具と考えることからは、決して生れないものである。もとより小説の形式は常に、その作家の陰謀である。充分にたくらまれた陰謀ではある。埴谷は、首猛夫と共に新しい加担者を次から次へと生み出すべく用意している。しかしこの主謀者はおそらく、この陰謀の形式を、まるで滝にうたれ、渦に巻かれるような抵抗を感じつつ、創作していることであろう。何故ならば、彼にとつて小説とは、存在するすべてのものを、一つの結論にまでひきずつて行く労働だからである。

投げ出してしまふことによつて、器用にバツと投げ出してしまふことによつて、小説らしくなる小説もある。ただちよつとつかまえることによつて、すばしこく或る男女の姿（その姿たるやきわめて安易な姿なのである

が、などつかまえることによつて、ようやく小説だと主張している小説もある。そのような投げ出し方、つかまえ方を、埴谷は好まない。彼は自分の長時間にわたる労働、それに従事することの困難をよくわきまえている。そして彼は何よりも、それが彼に与えられた労働である

ことを知っている。それ故、彼は書かねばならぬ。彼がそれを書くことは定められている。そのように定められたことの苦しさに、彼はよく堪えるであらう。彼が書きつつあることは私たち、小説を書きはじめている者たちに勇気をあたえる。その労働への勇気をあたえる。

壇谷雄高論——吉本隆明

すぐれた対立者はいないか、対立者はいないか、わたしは、こんな呪文を、一二年來、胸のなかでくりかえしてきた。現在では、どこをさがしても、敵になにかをあたえうるすぐれた対立者は、存在しなくなっている。わたしにとつて、彼はいつも卑小な敵であり、かれにとつてわたしはいつも卑小な敵であるというわけだ。いまでは、思想は、ちやうどそれが入りこめる程度の卑小な器をもとめる。器はすべて、規格品である。今日、甲の器からでて、乙の器にはいり、乙の器からでて丙の器にはいることは自在である。わたしの敵は、いまずべて甲でなければ乙の、乙でなければ丙の器であるにすぎぬ。このような容易な敵と、容易に思想的に敵対しうることは、わたしたちの時代の美質でなければならない。かくして美質にとりかこまれながら、砂をかむような素漠たる対立をくりかえすのである。

わたしにとつて、甲の敵は、きみの云っていることは、労農派も昔いつたことがあるし、福本イズムとやらもきみの貌ににっていないことはない。ヒルファディングも、

『金融資本論』のなかで触れていることだ。専門家たるおれをさしおいて素人が口出ししてもらつてはこまる。もつと社会科学を勉強してもらいたい、などとしたり貌で忠告する、墮落したバリサイの徒である。このものたちは、学者としてもつまらぬ存在で、一術語を解説するために、百の文献を参照するというような、敵密な実証的な努力にはたえられないくせに、素人でさえ、手易くつめ込めるような、知識をもとにして、ジャーナリズムにおどつている小野心家に過ぎない。

乙の敵は、わたしにとつて何か。かれは、学生時代は、幼稚ではあるが、現状変革の思想的なヴィジョンをすべての人民の運命と照しあわせて検討する術を知つていたにもかかわらず、十年の政治生活のあいだにすべての良き芽を摘みとられ、一個の官僚に転落したものである。もはや、かれのところに人民の像は面影さえもみえず、ただ、組織内の派閥と、党内ヘゲモニーの問題に頭を占領された箸にも棒にもかからぬ小官僚にすぎぬ。おまえは、おれのような政治生活をしたこともないのに、やた

らにおれたちの批判をふりまわすのは怪しからぬ。おれは、これでも数カ月政治運動によつて監獄にぶちこまれた貫録付きだ。おまえなどもひとつ監獄へぶちこまれてみるがよい、などと文学青年まがいの小官僚の分際で、ヒステリックな叫びごえをあげるのである。わたしは、おまえなぞ五六カ月では足りぬ、せめて十八年くらい独房生活をして頭を冷してくるがいい、などとやりかえす親切心をもちあわせていない。殆んど断言してはばからないが、運動が退潮期にさしかかつて追いつめられたとき、おれたちが孤立したのは、おまえたちが協力しなかつたせいだ、などと泣き言をいうのは、かならず、このものたちである。かれは、何ごとも、自らの主体性において決定し、行為を選択し、それをつらぬくという充足した思想をもちえないため、官僚的な尊大さと官僚的な卑くつさのあいだに動揺する平和捕虜になり下がる。アンリ・ルフェーヴルは、『哲学者の危機』（総和と余剰第一部、森本和夫訳、現代思潮社）のなかで、このものたちを指して云つてゐる。

「教条主義者は謙虚である。彼は何物をも発明しない。彼は創造するということをしてしないのだ。創造したのは彼ではない。彼は絶えず《創造》という言葉（創造的マルクス主義など）（構造的改良とよめ——註）を口にす。しかし、彼自身は謙虚である。彼はこれまでにいわれなかつたこと（權威によつて、權威をもつて）に恐怖を感ずる。彼は、それを怖れて、震えるのだ。繰返し、習慣、

風習が、真実の基本となり、その不断の確認となる。自分に關しては、彼は謙虚以上なのだ。そして、この謙虚さは、驚くべき尊大と自惚れの中に、その構成要素として入る。（中略）教条主義者は、人が彼を完成した美しい住居の所有者としてあるいは少くとも相続人が管理人として見るかぎり、謙虚である。ところが、この満足した謙虚さは、私を満足させはしない。教条主義者たちは、私を傲慢だと見る。よろしい。私はただ、この《傲慢》あるいはむしろこの矜持、この不満が、哲學的精神、あるいはそこから我々が救出すべきものに合体することを考えてゐるのだ。」

ところで、丙の敵は、わたしに云う。きみは、文学のなかに社会科学の方法をもちこむことによつて、文学自体を枯死せしめようとする偽詩人だ。そもそも、文学というものは、純粹に美的なもので社会科学とは縁うすぎ芸術的な感動の所産である。……ばかばかしい。自明の繰言はやめるがよい。このものたちのいつてゐることは、わたし自身がいままでの文学的な作業によつて、このものたちよりもはるかに厳密に論及してゐるところだ。ただ、わたしとこのものたちとの差異は、このものたちが、あたかも靴をつくることに専念する靴屋というにすぎないような、文学をつくることに専念する文学者という職人的概念を芸術的精神として誇示するのにたいし、わたしは、それを誇示するに値しない自明のことと考える点にある。そして靴屋が文学にかかわつたり、文学者が政

治思想にかかわつたりしたら、それは職人的概念をふかめるために試みるに価するとかんがえる点に、このものたちとの決定的な差異があるにすぎない。このものたちは、文学の領域においてさえも、わたしを啓発するに足る仕事をもつてはいはしないのだ。このものたちが、わたしを不快でならないのは、このものたちの文学的な精神が、売文と売名以下のものであるのたいし、わたしの売文が売名以外の憤怒のごときものを、いささか含んでいるからにはかならない。

わたしは、丙の敵のつぎに、丁の敵について語つたとしても、おそらく、こんな砂を噛むようなことを、繰返すほかないだろう。現実にあくまでも執することは、わたしのなかにある思想の国の国是であるし、とりわけ現在の世界は、砂を噛む索漠さに耐えることを思想の展開のために必須の条件としている。わたしはこういう卑小な敵とのたたかいを避けようとはおもわない。しかし、このような卑小な敵とたたかうには、ただ、わたしがかれらとおなじ社会に生存し、あるときは、偶然にもおなじ雑誌、または異つた雑誌に、肩をならべて見解を発表しているというだけで充分である。いま、わたしが、いささか、これらの卑小な敵とちがつた思想について語つたとしても、かれらは、わたしのような不快な存在が、かれらの思想を通り過ぎてしまつた、などと錯覚しないほうがよい。

埴谷雄高は、思想が、書物に配列された知識や、現実の行動のなかでぶつかる感情的な事件ともちがつた何か

であることを知つてゐる点で、まず、わたしが現在当面しているすべての敵と本質的にちがつてゐる。「あまりに近代文学的な」「濠洲と風車」未来社」のなかで、はじめに未決の独房内で、語学の勉強用というような偶然からよみはじめたカントの『純粹理性批判』が先験的弁証論にいたつて、晨に道を聞けば、夕に死すとも可なりとはかくのごときものかとおもうほど震撼されたとかいてゐる事実は、埴谷のなかで、思想がどんなものとして存在しているかを、はつきりと物語つてゐる。

いうまでもなく、ある書物に展開された思想は、それが肉声をはなれた表現である理由で、震撼さるべく用意されたものの精神をしか、震撼することはありえない。語学を勉強するために『純粹理性批判』をよんだのは、埴谷自身がかいてゐるように、まづ多くの偶然であるかもしれないが、先験的弁証論の領域で戦慄をおぼえ、心底からつきうごかされた事実は、けつして偶然ではない。たとえば、社会科学や哲学が蓄積された知識であり、文学が感覚的な職人芸であるとかんがえてゐるものは、例外なくこのことを理解しない。かれは、いかに知識を蓄積し感覚的な芸をみがいても、けつして社会科学や哲学や文学の本質に参入することはできない。まず、わたしたちのなかで、強烈な現実的な事件があり、その事件が強要する精神的な適応の過程がおこり、このとき、はじめて紙の上にかかれた思想が、あたかも現実上の事件とおなじように精神上の事件となりうるのだ。このように、書物がひとつの精神上の事件たりえたとき、おまへはカ

ントを理解するだけの哲学上の素養があつたのか、などと問うことは意味をなさない。ひとは、知識なくして本質に参与することもできるし、知識があつても本質をあかされない場合もある。

しかし、ある人間にとつて思想がその本質をさらけだしてみせるためには、ふたつの条件がいる。ひとつは、その人間にとつてすでに精神上の（知識上のではない）素地が蓄積されていることである。もうひとつは、その思想が、その人間にとつて隔絶した高さにあるばあいである。たとえば、わたしにとつて、埴谷雄高における『純粹理性批判』ほどの切迫さはないとしても、それにちかい体験を書物にたいしてもつたのは、十代半ばにおける『昆虫記』、二十代はじめの『新約聖書』、二十代半ばの『資本論』であるが、このいずれのばあいも、その強烈な精神上の体験は、一種の隔絶感、ひらたくいえば及びがたさの感じをともなつた。まだ、幼なく、いまとちがつてさまざまな可能性としてあつたにもかかわらず、わたしがけつして到達できない、隔絶した思想の高さがそこにあつたのである。

こんど、埴谷雄高が精神を震撼された、あきらかにかいている『純粹理性批判』をとくに先驗的弁証論の領域をしろうとして、古ぼけた岩波文庫本をとりだしてみた。残念なことに、ほとんどそこに提出されている問題についてゆくことができなかったのである。純粹理性の二律背反の章にこうかいてある。

「我々が理性を現象の客觀的綜合へ適用する場合には全く異つた結果となる、この場合、理性は絶対的統一の原理を非常な尤もらしさをもつて貫徹しようとするが、やがて宇宙論的意図に於ては、かれの要求を断念することを余儀なくせられるような矛盾に捲き込まれてしまふ。

すなわちここに、人間の理性の新現象が現れる。詳しくいえば、それは全く自然的な矛盾であつて何人もこれに対して穿鑿をし技工的な罫をかけることを要せず、理性は自らしかも不可避的にそれへ陥る。因より我々はこれに由つて全く一面的な仮象が惹起するところの空想的確信のまどろみに對して予防せられる。けれどもそれと同時に或は懷疑的絶望に感溺するか、或は無謀なる独断的暴勇を振り起して、自説を頑強に固守し、反對論の理由をば更に傾聴せず、これに對するに公平な態度をもつてすることを知らないように誘惑せられる。両者いずれも健全なる哲学の死である、尤も前者は所詮まだしも純粹理性の安死術(Buttanazie)と名づけられうるであらうけれども。」(天野貞祐訳)

ここで何がいわれているのか。ようするに人間の理性は、あくなき正確さで適用されたとしても、自然との断層をあきらかにして、不可避的な矛盾をさらけだす。理性は、仮象にまどわされた空想的確信にくらべれば、はるかに自然的なものに接近しうるにもかかわらず、ついに必然的な限界をもたざるをえないものだ、ということ